はるかな鐘の音

堀内純子
絵 鈴木まもる

かな鐘の音

子・作／鈴木まもる・絵

913

堀内純子

はるかな鐘(かね)の音(ね)

講談社　1982

192 p　22cm（児童文学創作シリーズ）

ほりうち　すみこ

はるかな鐘の音

昭和57年12月15日　第1刷発行

定価980円

著　者　堀内純子(ほりうちすみこ)

発行者　三木　章

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話　東京03(945)1111(大代表)

振替　東京8-3930

印刷所　株式会社　廣済堂

双美印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

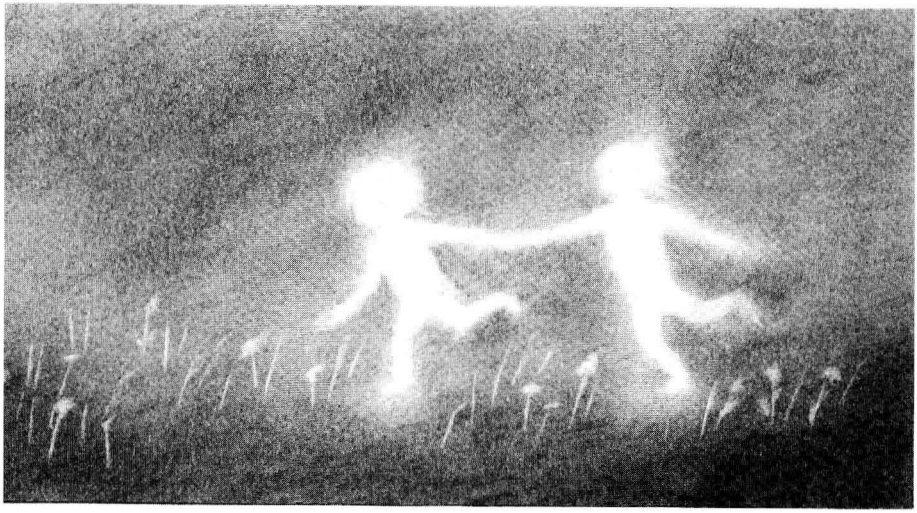
© Sumiko Horiuti　1982　Printed in Japan

落丁本・乱丁本は，ご面倒ですが，小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にておとりかえいたします。

はるかな鐘(かね)の音(ね)

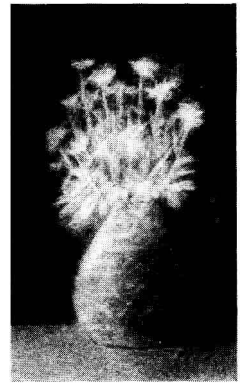
目次

一の章 …… 5
二の章 …… 31
三の章 …… 63
四の章 …… 95
五の章 …… 127
六の章 …… 149
終章 …… 176
あとがき …… 188



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一の章



みゆきたちがはじめて小島先生にあったのは、十一月末の晴れた静かな夜のことでした。
そんな夜だけきこえるどこかの教会の鐘が、市街の上をこえてかすかにひびいていました。
海に近いひろびろとしたN市。そのほぼ中央にたつ、市民病院五階、五〇三号室の三人部屋に、みゆきたちは入院していたのです。
かみの毛がふわんとちぢれた、ちびであまえんぼのみゆき。
本ずきでまじめだけれど、ちょっとそそっかしいところもあるふゆ子。
三人の弟と毎日とっくみあいをやっていたという、まんまる顔のかおり。
みんな五年生の女の子ばかり。入院の時期も学校もそれぞれちがうけれど、病気は同じ腎炎だ

し、ここで二か月もいっしょにくらしているので、もうすっかりなかよしです。病気も、いちばんつらい時期はすぎて、三人はけっこう楽しくくらしていたのでした。

でも、この夜はすこしばかり調子がちがっていました。病院の十一月の夜というのは、なにかへんなのです。はやくから暗くなるせいでしょうか。まだ八時をすこしすぎたばかりというのに、夜がもうずうっとつづいていて、それがこれからもいつまでもつづくのだ、というような、そんな感じになるのです。螢光灯ばかりがむやみやたらに明るくて……。

みゆきは、むっくり起きあがりました。パジャマのままベッドをおり、病室のドアをすこしあけて、ろうかをのぞいてみました。

ろうかはまぶしくあかりがともって、病室がどこまでもきちんとならんでいます。しいんと冷えきって、人のすがたもありません。いつもはにぎやかな小さい子の部屋も、なぜか物音ひとつたてず、赤ちゃん部屋もひっそりしています。今夜はなにもかわったことがないのでしょう、看護婦さんたちもドアをしめて、ナースステーションにこもっているようです。

「みゆきちゃんったらあ。」

かおりも起きてきました。

「そんなかっこうでうろちょろして、またかぜひくでしょ。」

みゆきのかたに赤いガウンをかぶせて、かおりもいっしょにろうかをのぞきます。
「ふたりとも、なにやってんの？」
まじめ患者で、いつも婦長さんにほめられているふゆ子まで、起きてきました。
三人はならんでろうかをのぞきながら、
「あのろうかのむこうから、なんかがやってこないかな。」
「あのろうかのむこうから、だれかがやってこないかな。」
「おいで、おいで、すてきなこと。」
「おいで、おいで、すてきな人。」
かわるがわる、そんなふうにささやいたり、うたったり、どなったりしたのです。
でも、ろうかはあいかわらず、冷たく、しいんとしているだけでした。
「だめ。なあんにもやってこない。つまんないなあ。」
三人はそういって、ベッドにもどりました。
病院の白いユニホームを着た女の人が部屋にはいってきたのは、それからすぐのことです。
「うわあ。」

その人は、部屋の中を見まわすと、すっとんきょうな声をあげました。

「うわあ、どうしよう。顔まで似てる。三人ともちびでいたずらそうで。」

小さいころのなかよしがサオリとフユミ、そしてわたしが小島ユキ。いま、ろうかをとおりながら名ふだを見たら、かおり、ふゆ子、みゆきとよく似た名まえがならんでいるので、ふとのぞいてみた。そしたら顔までそっくりなんだもん。と、その人はいいました。それで三人には、この人が薬局の小島先生だということがわかったのです。

三人はこれまで小島先生にあったことはなかったけれど、「薬局の小島先生」と、スピーカーがよく呼び出しをしているので、名まえは知っていました。そして、その小島先生が薬局の仕事のかたわら、童話を書いているということも、看護婦さんたちのうわさをきいて知っていたのです。このさびしい十一月の夜、これは絶好のカモがまいこんできたというものです。

「つかまえた！」

まっさきにさけんだのは、もちろんかおりです。

「その三人の女の子のお話しして！」

ふゆ子も、目をきらきらさせて、熱心に小島先生を見つめました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お話ししてくれないと、ええとええと、熱がでちゃう。」
みゆきなど、そんなことをいいだすしまつです。
かおりが、すばやく「お話のいす」を先生にすすめました。
「お話のいす」は、この五〇三号室にある、たった一つの背もたれのあるいすなのです。あいづちをうつのがとてもうまくて、ギュイーと感心したり、キュキュキュッとわらったり、クイーとなきだしたりします。もうずいぶん長いこと、たくさんの患者さんや家族の話をきいてきたせいでしょう。
「はいはい、わかりました。話しますからお助けください。」
小島先生は、ひらりと音もたてずに、ベッドの足もとの「お話のいす」にかけました。小島先生は、わらうと少女のように見えました。ほっそりして小がらで、年齢は……さあいくつくらいなのでしょう。みゆきたちにはさっぱり見当もつきません。でも、そんなことはどうだっていいのです。ともかく今夜のたいせつなお客さま。ぜひとも話をさせなきゃなりません。
「それじゃ、はじめますよ。」
小島先生はいいました。
「でも、ちゃんとおとなしくねていなくてはだめ。起きてあばれる子はお話の国につれていきま

せん。」

三人はいそいでベッドにもぐりこみ、話がよくきこえるように、まくらをかかえてぐるりと百八十度、ねる位置をかえました。おもしろいことになりそう。

「オッケー、それでいいわ。」

小島先生はいいました。

「それじゃ、目をつぶって、わたしのいうとおり思いうかべてみてね。ユキとサオリとフユミよ。三人は、五年生のみんなといっしょに、大きな画板をかかえて林の中にならんでいるところよ。」

「大きな画板をかかえて？」

ふゆ子がたしかめました。

「わかった。写生会でしょ？」

「そう。五年生全員、カツラの林の中にならんでるの。まるでヒマワリの花みたいにあざやかな黄色にそまったカツラの葉が、パラパラ音をたててみんなの上に散ってるわ。林の中は、目がいたいほど明るいの。こずえごしに濃い青空が見えてる。」

「秋なのね。葉っぱが黄色いんだから。」

かおりも、目をくるくるさせて口をはさみます。

「そう。昭和十八年――いまから四十年も前のね。そしてところは韓国のソウル市――そのころは日本の植民地になっていて、朝鮮の京城とよばれていたんだけど、ややこしくなるから、わたしのお話の中では韓国とよぶことにするわね。――そこのね、南山という山に、五年生全員で写生にきているの。」

小島先生は、すっかり五年生にもどってしまったように、目をかがやかせています。

「ほら、かおりちゃん、起きあがっちゃだめ。あなたはこれから昭和十八年にきて、おてんばサオリになるのよ。みゆきちゃんはなきむしユキに、ふゆ子ちゃんはやさしいフユミにね。では、しゅっぱあつ。フルフルプルプルブルブルバー。」

とつぜん、三組の修がユキたちにむかって話しかけてきた。

「おまえらの柴田先生って、女みたい。なっ！」

ちびでまっ黒けで、いつもひざをすりむいている修。どろんこの赤白帽を、ひさしを後ろ向きにしてかぶっている。

「なんてこというのよ！」

ユキは、むきになっていいかえした。

「シバタテツオって名まえよ。そんな女って、いる？」

すかっとしたたんかをたたきつけてやりたいのに、ユキときたら、はじめっからなみだ声になってしまう。

ユキにはお父さんがない。四年前、ユキが一年生のときになくなったのだ。お父さんは植林の仕事をしていた。あれはてた朝鮮半島の山々に木を植え、育てて、緑の山によみがえらせる仕事にうちこんでいるお父さんは、ユキの誇りだった。もちろん、いまも誇りだけれど、お父さんにあうことはもうできない。いま、お父さんのいないユキにとって、柴田先生はかけがえのない人だ。女みたいなんていわれて、だまってひっこんではいられない。

「お気のどくさま。」

修は、ひっかき傷のあるあごを、水平になるほどつきだした。

「柴田先生が女じゃないってことなら、教えてもらわなくても知ってますね。女だっていってんじゃない。みたいだっていってんだぞう、文句あんのかよう。」

修はこのごろ、あまり評判のよくない中学生のグループにくっついて歩きまわり、がらの悪さにいちだんとみがきがかかったといううわさだ。ユキにかなう相手ではない。

「ようし、それじゃ、うかがいましょ。」
ユキをおしのけてのりだしてきたのは、まんまる顔のサオリだ。
「あんた、柴田先生のどこが女みたいっていうのよ。きいてやるからいってみな！」
小さなかたをそびやかして、たんかをきる。
「いってやるよう。」
むこうも、三人ほどのりだしてきた。
「ゆでたまごのまるむきみたく、つるうんとした顔しててさ、みなさあーん、なんかいうじゃんか。」
へんなつくり声をだしたのは康政。
「おれっちのな、坂井先生な、柔道二段だぞう。おれっち教わってるんだ。幸せだなあ、おれっちは。かわいそうだなあ、おまえらは。」
これは弘。
「ざまあみろ。鉄棒だってすげえぞ。大車輪百回できるんだから。ざまあみろ、腕立てふせなんか一時間だってつづけられるんだから。おまえっち女先生にやれるかよう。」
勢いづいた修は、わるいたぬきのように目をぐりぐり動かし、鼻をぴくつかせる。

修とユキは家が近くて、小さいころはなかよしだった。ユキの家で飼っていた子イヌのムクを赤ちゃんにして、お父さん、お母さんのあいだがらだったことさえある。こじきごっこのあげく物置でねむりこんで、両方の家を大さわぎさせたこともある。

けっしていっしょに遊ばなくなったのは、いつのころからだったろう。このごろでは、学校のろうかなどであっても、修はどこふく風というようすで、てんじょうなんぞをにらんでいる。よくよくまわりにだれもいないと、「べえっ。」と、すごいより目をしてみせることもあるけれど。何年ぶりかで話しかけてきたと思えば、このなんたるにくったらしさ。ユキは口をぱくぱくさせるばかり。なみだが、えっえっとのどをしめつける。

そのユキに味方して、いつもは、しとやかなフユミもわりこんできた。

「柴田先生はね、ピアノがとってもじょうずなんですからねっ。」

「そうよそうよ。日本でええっと三番めか十番めくらい、うまいんですからねっ。」

すかさず、サオリがあいづちをうつ。

でも、男の子たちはそろって、「ふん。」と、鼻を鳴らして答える。

「へええーん、ピアノですかあ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com